

かとう こうほう
書家 加藤 光峰 さん

孤高の書家とは、この人のことをいうのだろうか。

3千年以上も前の殷や周などの中国古代王朝で用いられ、漢字の原型といえる甲骨文。亀の甲羅などに刻まれたこれらの文字や、それを青銅器に鑄込んだ金文をテーマに六十数年、エネルギーあふれる作品を発表し続けてきた。

北海道・室蘭出身。6歳から書塾に通い、中学・高校と書道部で活躍した。上京し、旅の書家と言われた桑原翠邦に師事。書を本格的に始めた東京学芸大学書道科3年生のとき、甲骨文に出会う。「『そこに古代の人たちの息吹を感じた』とおっしゃっていました」と、教え子の釜石十軒さん(75)は語る。



「古代人の息吹」甲骨文探究

当時、甲骨文は研究が進んでおらず、未解明な部分が少なくなかった。だからこそ持ち前の開拓者精神が刺激されたのか、古代文字が織りなす新しい表現の世界にのめり込んだ。

大学を卒業した1957年に亀甲書綫会(後の亀甲会)を設立した。69年から病に倒れる今春まで、教え子たちと作品展を50回にわたり開いてきた。

こわもてにも見えるが、「けっして声を荒らげない、優しい先生」と2001年から師事した土居筍さん。15年間学んだ秋月李雨さんは「原典に学び、その上で自分の線を追いつよと教えられました。私たちを作家として尊重してくれた」と話す。

独自の世界を追究したが、教え子には「他の団体の作品も見て勉強するように」と説いた。古典の臨書を重んじ、自宅では大半の時間を勉強と制作に費やした。「いつもはお弟子さんと一緒に作業していたのに、今春、初めて私と2人だけで制作したいと言われ、驚きました」と長女の美山美環さんは言う。そうして誕生した6点の連作は3月に発表され、「最新作が代表作」の口癖通り、好評を博した。それが遺作となった。

(編集委員・宮代栄一)

加藤光峰さんと遺作「蛇身黄帝世
四目史官 省禽獸足跡 創作文字」
3月、田中良知さん撮影

5月29日死去(死因非公表) 本名・加藤重美 85歳